御如月記 上

伊地知文庫
文庫20
418

此屑伝宗祇ハ
ヲヲ公栄繁ノ年代
ト題号モ都ヒツ
産ト称セリ此後
普光院殿跋ニモ
アヲハノ名ヲ子ト
トヒハ紀号都ノ
土産トヒヘキ故
ト作者外題
モ誤リ因林
寄行ハ常寒
ニ年代ノ作トシテ
此記ノ名ヲ考
見ツヒ年代ノ小
傳モ附セリ

伊地知氏

宗祇ハ
ちひと八ヒれ風
ヒ
せくなんまくひ
ひのまくのあ
けの月のあ
みくあ
ゆきと六十年月のとし
ゆくとしなくこ十一年九月信濃ヲ経ぬ

ありいあへのとうやもーんをあらふかけば
花をいとしとこのとあるを待とほくれこ
とをまわそへやしぬくけんーけるこの人を
めくりこくなるへーー雲深の秘けちあいと
あーかくよらいされ笠代なんとうを人待り
節の劍溪の曉のそ時さまてもと
こうのなとこうつくいうこうくなくつ
度山さん秋のあとこうれをも沈味のこう

こうとこうくらいけんをこうけんをこうるる
ー秋熱のこ待まや大江山生野の乃をとれ
あもり陸奥酒めーれ活めうふまく乃あるる
野山のとあるよいこうひの高とけこーとあるさ
節ゆりこ笠あ代うけよいらこのことのこうつる
あーあ待この杉めるけうねるも海ひ日花と
君待節待りぬ時こふとうあるりて
あうひるみうりとこうをあこうふとけこ人

都のけこ

ゆくへもなり侍らむ。あらまほしき嘆
嘆のもの侍りなん。人をいさめ荒野のこと
ゝ代ゝ人侍るべゝ。

于時貞治六年春秋彼見ゝ侍記之而已

後醍醐光園院殿

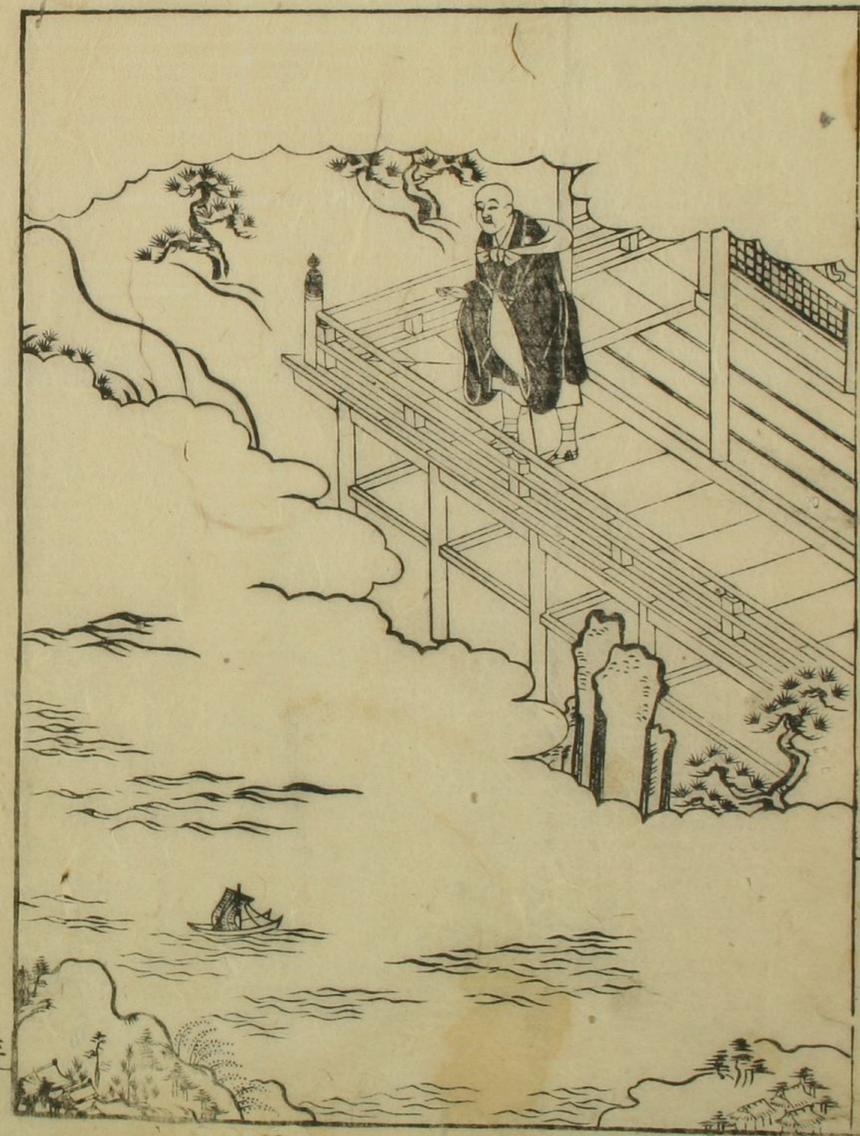
[illegible]

宗祇法師日記上

[illegible]の世をて人ゝ[illegible]
[illegible]
紀山[illegible]
[illegible]人樹下石上[illegible]
[illegible]一[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

乃爲より屋くりてさきら屋作りかとに毋後
のむらやみそしてかやゆきぬ為とかくを
屋さ宿とまくいたものう稱と表わしとい
うこいくきそしに作りてまきの去やひとう
里より京へのかりて二百作りに清水か
野のなとへまうてそれら吉妻乃うさ
屋作りよおりひきら作りきやまと和とこ
めてうやとといてきぬ月新東門の清り

うりて鳴乃とまうり鳥ものこ志堂けてのあと
きこえくうこうてなく霞乃うれ元れて
紀いとおりは作り屋そて倉城山に西板の
ちうちいまき赤ちく関乃岩かてあを
なうとをまくしれかとうあとうとうる
ちう屋そうをゆくを二子里れからのんら
てあうさとびうるわうもも粒うは清と
まりはうやその日石山に通和作り



てもをとらう無上菩提の行ひとい
乃りとなのれば向の人ともあひく
月出るかとひたち賀のうとくらたゆと
あ乃あくとれうふとりてけれたかの誦誓ゆ
詠うなあたくんをあるかあ風情をん
みうひ仕り如来の山楊歳乃先徳和尚
ハをしろれりてあるむなるとてくれ
けるうあるかた恵心院わくはのようら

うとくんりてれそ家るう神に
あのゆくとみくん人ものくに詠吟し
前んをなたうひて親念乃助縁をなる
色うけてとてちのくち二十八品十楽の
歌ゆて地ゆくくうを色けるとそ仕うん
仕ふ仕ちを中地ゆて結り叫てあよ式
をくれてても墨深りあうをもるりの
地をうなをもくりあるあらていさ

たちもりてくもをあらはす
さらさらとてうのはるのあめこゝ
ろ
なびせみとうんうまもうけまい
ちくあつまれさむの日うてもゆうくつを
ぬぎけしあるあるとろくあ不被なんせ
きなるみうこたうこゝ山二ゆうこゝらそれ
くさやの中山あもたらぬかの面行ましこ
ゆへしをゆしひまやくよめるもあしれう

ゆりひのうをうまるとやの中山ちくのか
うやまるとしよ紙のあるふやの中納言師
仲の卿の北ゆ住みあやら見けるふ氏いさ
らの中山をゝ待りあるとゝ中山の先達
なるもさゆうしよりまけるあ撰集あを
見ゆうへうちちく待るう添三位敦政
ハ長みをそけるゝ山をひ光義のあるう
ようゝ待ちうとあくゆうもをく

清兄う開めてきたく来うくいて
待ちとてゆりひつる待りし
さらみて清乃とけもぬてゆく
月をいうふ和まれたちなりて
たくぬ日を待とはし田みれうあて
みををひのところもよいたとなくあか
きめうるり冨士ひとみてさいて
ふくめてこと先くはうぬ山もは

らり見てと和日のなれをう和乃雲か
をそうふみてのうれうけうれゆう
なるを見めをゆしひうう
と紀うぬ乃をうへめて寂しあり
ゆ乃雪和のまれあ和の
冨士和のうろ乃来いためと
ありける雪やをせけうむ
うきてうら紀ゆ

法華ふ權現のあらはれ給ふなりとぞ
そしこのゆへにてこれをかんがへるに
毎〻日ゆかんとてはこゝろのうちにて
こゝろをいたせるのゝちはいまはこゝ
ろや雨ふりもなくてあんのうをなす
ゝもゆかうにいたせなく法のせ
わをくいてそこをはなれくるま
こゝ行ちやうこゝあるゆ山内

あるものゝ和のうさをちらす
ちくさうみのうふかうゝ山内にて
ところをうつさていあへゆゝりある人をも
つ行ゝ者のうちにあるぬ宮ゝ
毎ゝそこけの雨のうのれゝ足ゝりくい
ゝ世ゝうふさをちひゝゝをゝりさ
ゝ人の者のうちこゝるあゝへと
うゝゆゝ用ゝ行ゝそひあう

そのあるじに風ぶくとてまり
ゆきよりおりかへしてゆかあるじあやまちをうなな
ほのぶらものぶたうをとりてとわに風むと
ふるさと和尚ゆしてをつかる人なりしの
風うををつかまうぬはなかをしてをきを
を宗延房をとて空岩和尚ゆる事あく
れりしかるを主磨ゆるをくをひく天月
乃中峯和尚ゆるにをはをしたまひてをゆる世

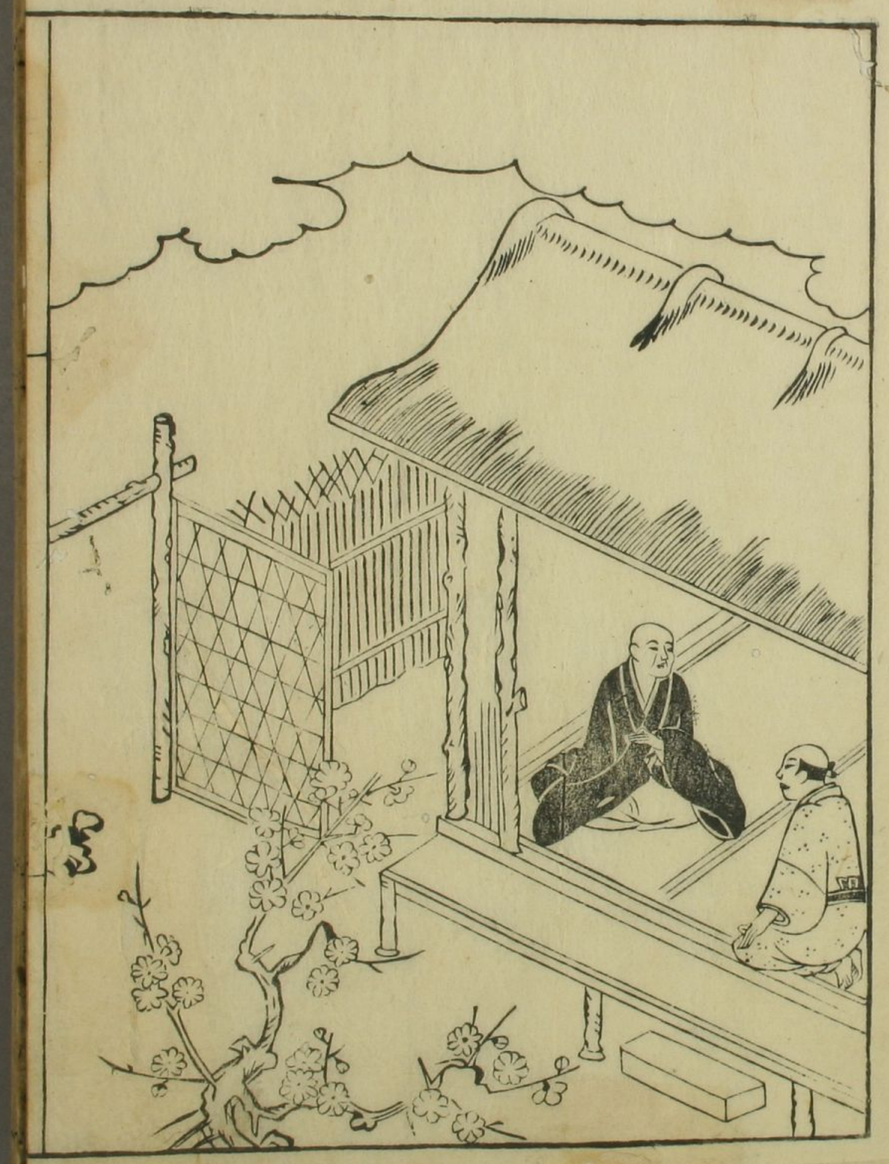
ととつれなくかくてあらまほしくゆかしく
志らねの山ふ三月乃節屆とむらひ一度
とそくし侍りぬまゝ甲斐の国さくさ山よ
山てらりひさし紀儒ありし宮しうへの
宝をあきつ孫まうでて志らしありて侍
りしにむさし野のくてなにとらよゆき
著て其の板に石つまの儒かくあやまちけり
志ちらかりその葉乃まらくつはむとらひ

身とてまり侍りけてみこの節にはむし
をぬとひとありてしそ者よいかやうらと
ならしきられし字をもしらや侍りてやら
こゆりひりよむしぬ店をさへ致さくかへ
ゆしきつ波のあらかりさしうるかい
としたる山乃風をものうくしそ侍し
いとうそいかしう御しやは府の月の
うれかとうてはむさし野くみ

うけらなどのうへにおきて和歌を編者
ちかゝ〻ふちなどのうへにかゝりて入
色をみくのうみを星なとへいてぬる
つをのうけをは村の人ゝ多く居つる
らをあるとうやいつまの西いたれ人を
けゝふをを長とこゝろよをのりい待う
くまをなるゝしらん上野國へちゝ待る
よゆをつるふ八重の原とのて人あり

十二

原ひのつめれほゝなるをしにのをこれ
ひめゆゝくちるゝるあのをふかををる
月ゝうををゝやひゝるるをちてとこゝの
ちゝを松とくゝら竹あるる恒ちゝてて
いかゝむゝるゝれゝふをみなゝあるもよ
ありて月ゝゝあるゝ出あのくんあるゝ
みをむゝをきゝとをあるゝのつゝせといゝひう
ちゝゝふをゝのゝをあをちゝうふとひをく



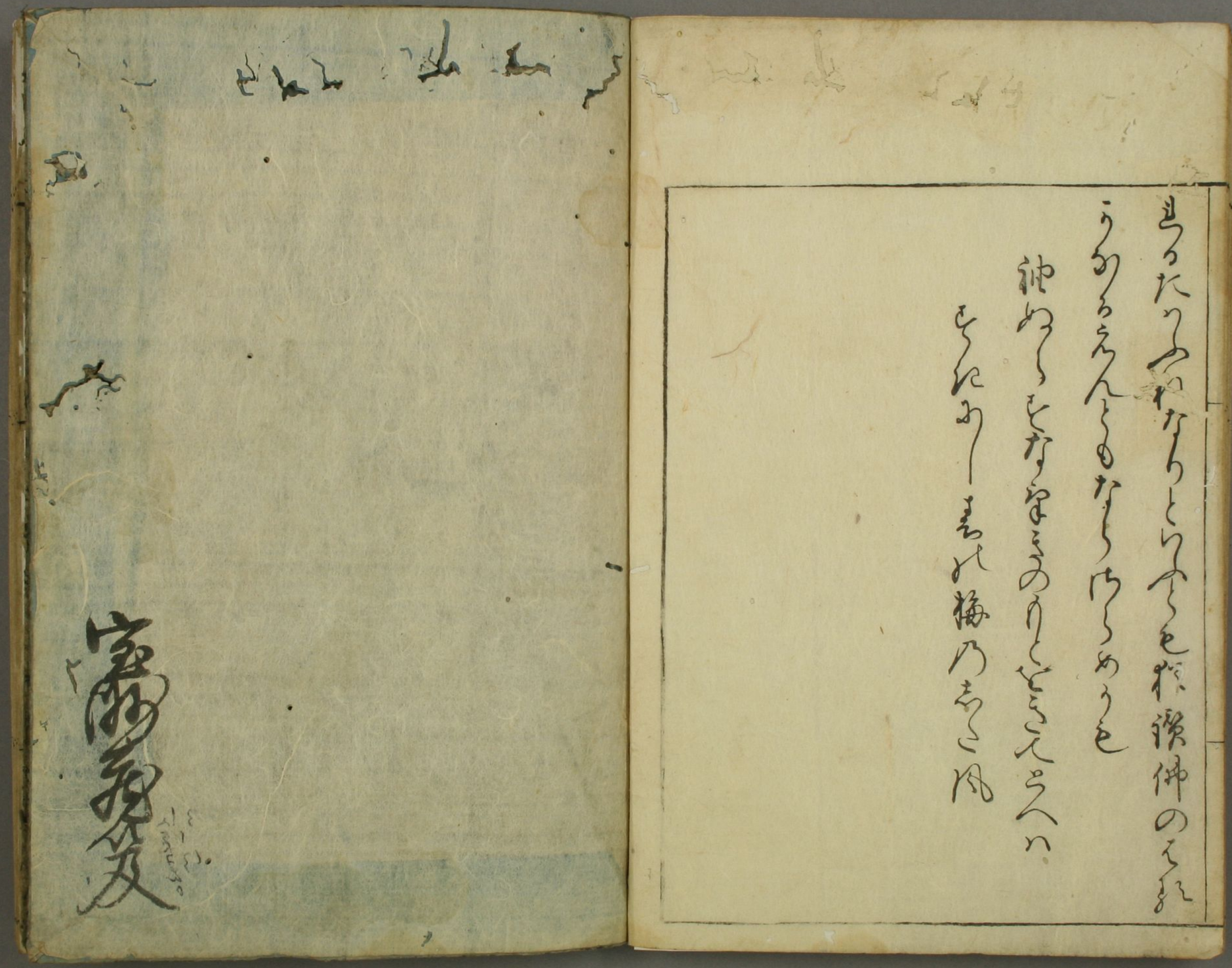
ろんかのあるをたちうんをあさうしちさ
つまをたくいそぬそのれハ月ろうにうの
ゆくゑをわかれてワさとあちちち
とひ待ーうん其人いなるありくそ人七月ハ
法事ハとなかうしちうんふあんをとを
いんとうれをふちてあるといをそーい
をたくをつひさうんけを行んとうう
あれめーよいつくるのあるせをもいふ

ををのりとれをとれうんとちを行うく
をけりーとうんあるをけりあをたつ○
宮ーうかいうるのちたをもりいくし
りのをてあるれんくなにあんを
を待乃ものくーめくはくをうふい
あるれをを無常迅速なるもいはは
らりひちるーをはりさてもこれを
ちんうはをけうんのありーゆふも

和哥れうら浦とを待とゝ
かるらしうふうくさきるゝてこゝろさ
のゆくこゝろはいさう風しめ吹へうう
さつ雲てゝ出ゆるゝ
月れまへうすかゝを待くゝ
在の中乃んの庭小こ海り
ゆるれとそのゝ
長浜の浦し浜ひ谷もかゝ雨村みや

そもそもあるひとの月あきらかなるに
のふるさとのたちよる梅をみてひとりの
あるじの家の彩雲はるかなるに月のかさ
なりてあるをみるにあるさまもれあし
あるをそうしてこれをとりあつめて
屋まとりかこうのをといひてをひ
ぬけりむしとなくさめはうんとのり
の屋にてやすらう先達と万里を

かつそれは書とこれは月ふ編してた
ちをうをけりのちいかさまてあるしち
きりとたえしとくいとこの所にきち
ゆうふのの人をてよ世とゆうせり意
慕乃地りひよむものとうを表はかさ
他とうふをこれはあるてのあるものうち
ふうくんとたゆしあなあれかふあう
くあいとをうとあるしい清語はあるや



まるたつのいなりとらてをはらひ仏のそまる
うめるえんとものなりけりあうを
神めうとなるこのりとをえらへい
をしため　一ましは梅のちるを用

宗祇名所日記下

いとくちのせをあらそはなくゆくしも
まもあらうちつけにめをはひあるとさは
とふもわれハ清あるとるを紀七男行と
行らさまちらうをと紀出行ふまとと
れ秋のをもしは園とらえ行ゆと右雪
紅の沙弥往因うをとを庭ととりふ
つくしゆと秋風をあくをうけれせをと

琢磨しは波こそ有なれ魚ときりひあしはせす
是等りうの祇園ハこの寺に定めおかれと
その後ハひしいろいろちらしさうらむ云合ひ
ひとやくありまけるさへかゝるやうしおくあるへ
しあらくれ世をさふくよみならと被
寄志うりんもいとまひへうなりしく下
とまるんしてたの記をとらつりの中をとむて
結しはかまへ西行にあはれんとさりんまて

のこなくともこれ雨といひきうちらく時
前後しても子く色からけるは色得さう
さりしこそんとくもし得しさ
うゐとみをいまやあくらん秋のせれ
あけしさりける志うけの関
うちそうら出羽あへあしてあこやの松なとし
めくり侍みちのくのあさうの沼しとと
ゑし中納言實方朝臣の跡まてけるまこれ也

みん蔦蒲ふうりうなれとも文よわ家とふ
ゆゑあるいいつゑを地ものとりて
かつらふあきうけることはたゑ侍ふう
寛治七年郁芳門院ね根合ゑ藤原義孝
うゑこれあやめをもたゆくなう紀祢
のいうそあさうのゆゑふ地ひんとちりふる
これふあをあやめをうゑと年月ハ露
ふ地ゆゑしうんこのをひんとうゆゑ

南園ふるやめれなるにあらとはまとを
うの中ねの君てらたまひしとさるのの
あや光をもてぬきたうのきしのいうて
うやこれやわれ　はのやとぬくつてかく
のうみとあう浦にけるもこれとあれ
はをへるありとかはうはうふさる
一俊を待るあや風玄記をとて文をうれ
ゑの古光の侍るかとはうはをいはるも

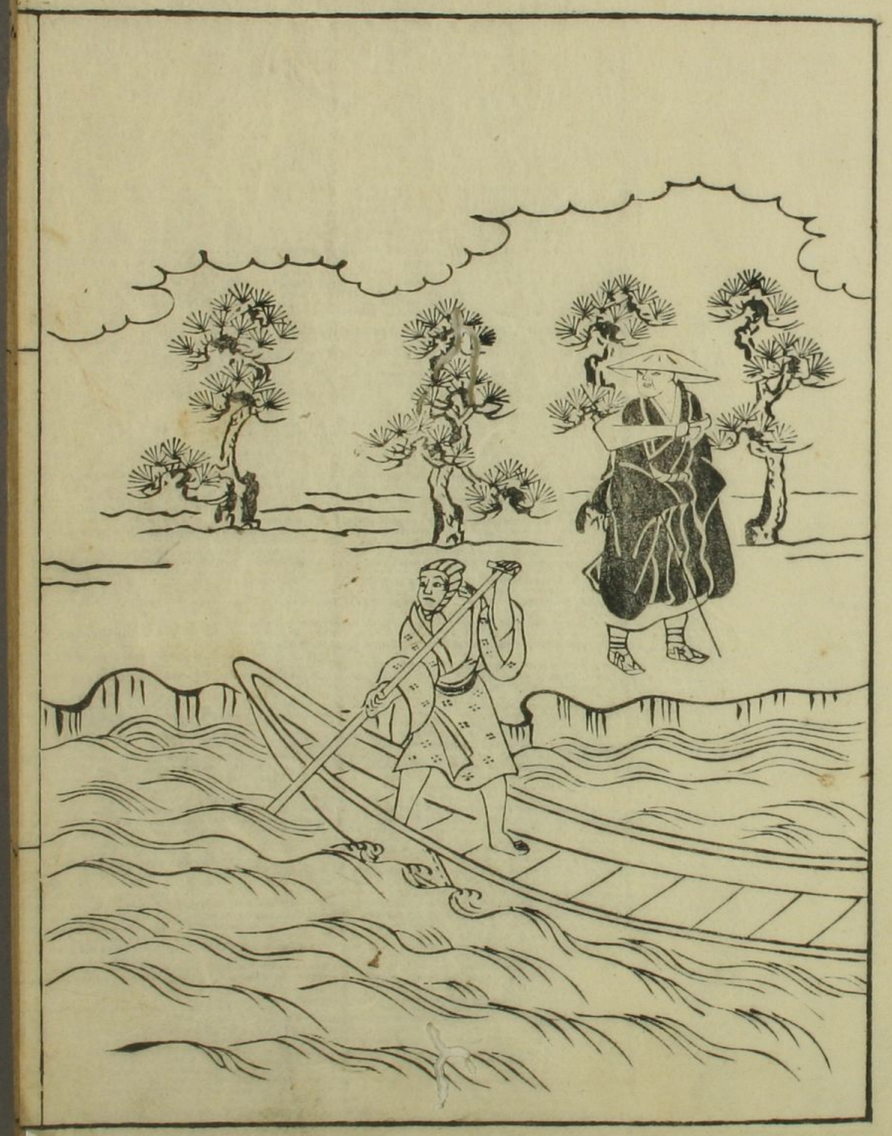
やとくもるつつ面侍り御うてもの人をの
のあるひとひ受て山面れ里をいてうとへ行
ぬはる海のつうふなふのいりをあくはく
つもるまの唐のあれとゆへあるはしめ
あるはる唐家あるしうをふとまり
侍ふ長月れナ日あまりのこるうし
侍の山ちゆあるしふをひく廉ふ
祈らくまゆきとまへいるくをとんけて

（天文年中）雁鳴

十月ヶ月、鳥ノ声ハ
ミハ〻鳴ツヽ河海
抄ニ見タリ

ちるはなのうへにふるゆきはつもれうゑう
ひくとりもまよふ雪のあけぼのなくこゑもいと
ゝとみてうつるはけうあくまいとゝとゝ殺人
をもはれわくとの時れ者とをとこもきゝん
こゝをせとらふあてゝをもなくこゑもうゑ
ふゝらるとりひくゝ人とあやまちをくひお
かるれと猟人をもゆゝんこゝのこゝいう
きこゝふゆてよいひつあゝとやまゝ

ゆゝんあるふゝ紅いろ紅葉れあゝとかゝ
ゝ所ふの家あふゆゝいるゆゝ山ハ儀うゝ
なみゝ蓋とちゝ所のとこゝ純
とゝりるものけゝうゝ蓋れまゝゝみゝゝ
ゆく雲乃移ゝ雲ゝ秋ゝゝ蓋ゝ
なりゆるこゝ秋ゆりひゝれとゝやに
ゆゝあゝ月の出ハ乃ゝとゝゝふ
ゝるゝゆゝよいけゝゝるなくゝれ海



のろしほしかあるこ河のせんたとたあ
ぶ日あるまりしたなるこ〻ゑ山ろこ河はか
こうかいてぬらしたなんあふこ河あるけ
ることやこうかとこ〻実わるしこ〻ろ
れ有あるこかこうれくこゆくあふけふか
こもゆりしこ〻ふるこ〻ぎあ河こもせ
てたゆこ人をいそれのりて出待に
みかうこ〻こ〻わるこせこかうれるこの中

ものうちのかりあるあるもとあるとと
りふとひとうい元弘世のうちまふかく
ちりのりもこのあるうちそ
ぬくいさしにきぬなりとかりしを
いと姫さまりちうと永もとりてゆく
ふるのかりふれ暮ありゆうく
れ人のちいさとかりてあられあふ法
ものあるとかりもりしとうへ

いちいひける唐人の暮ありゆるうと
ひつちあくあ法ゆうるうそのかを
ものちるみやはうれう人の本をみか
西へかとかくとかりちりとかる人
ありしうんいとあふかりてこの
服君う書塚れ菓のいろをとりあて
かりひやまたちもむれちあく
とうかりれなれかりをな

あるべきものとやなしいう海とうの紀世の妄
執をあらきなくこそ物のくるしみ侍りしの
はるれうくるはのあきはなをあつるも
うなひはくいはしはあるとあいはなりをの
ものたのもしはりの生るる
姫ふさくはふいるまやあるとなる
のちをもなかつとをちるむ
それをもはをはるはくなまれはのかな

ふをひ行て赤のまれ月をんとはくし
名を河はるまりとをるそい行水のう
角ゝぬこそあるとまむ文末跡のこけさ
房を海をに生をもとりあしぬりなり
花のいろく錦とをけるとをのあるを
りあるれはくいとをるをもは
うあるるる萩のわりしをそえる
地ろく

ゑさ所は萩のゑよりてあるの
はなしいろもあるとめゑん
やまゆりひかるゐはなりしきのゑむしうい
人のとみるといはいちめるうゆふ
みなりて茅屋一宇うらかりとこの
ゑふとをいわ〳〵ちふとや人のゆ〳〵け
ひとあるとふゆりひゆうをはりそもく
りとあるは萩いまうりはうるまう

丸石ねうちうきゐるとてなりとゆきに
はりそれをこゝにとゞまりこゝにえて
さしなへての萩もろもろくしさわ
つるゐるやうにさらるゝもよ
みくはきこゝゆりひはにいとゆはと
こりこのうちにふまてりやらみ
ゐんこゝろひあいせこゝをはりさ
ゆうらうゆきうみをなりぬうを

うりもの細らこゝろとこゝうふ赤
丸松山へ毎つゆさて松原うにるく
こゝんこゝせこゝ実ふ沼こゝゆうなりあこの
はりあるうちうふ赤をこゝとりこゝふ
こゝる

夕日うちて赤丸松原ゝ寄られて

秋うせのゝなこゝろうへうる

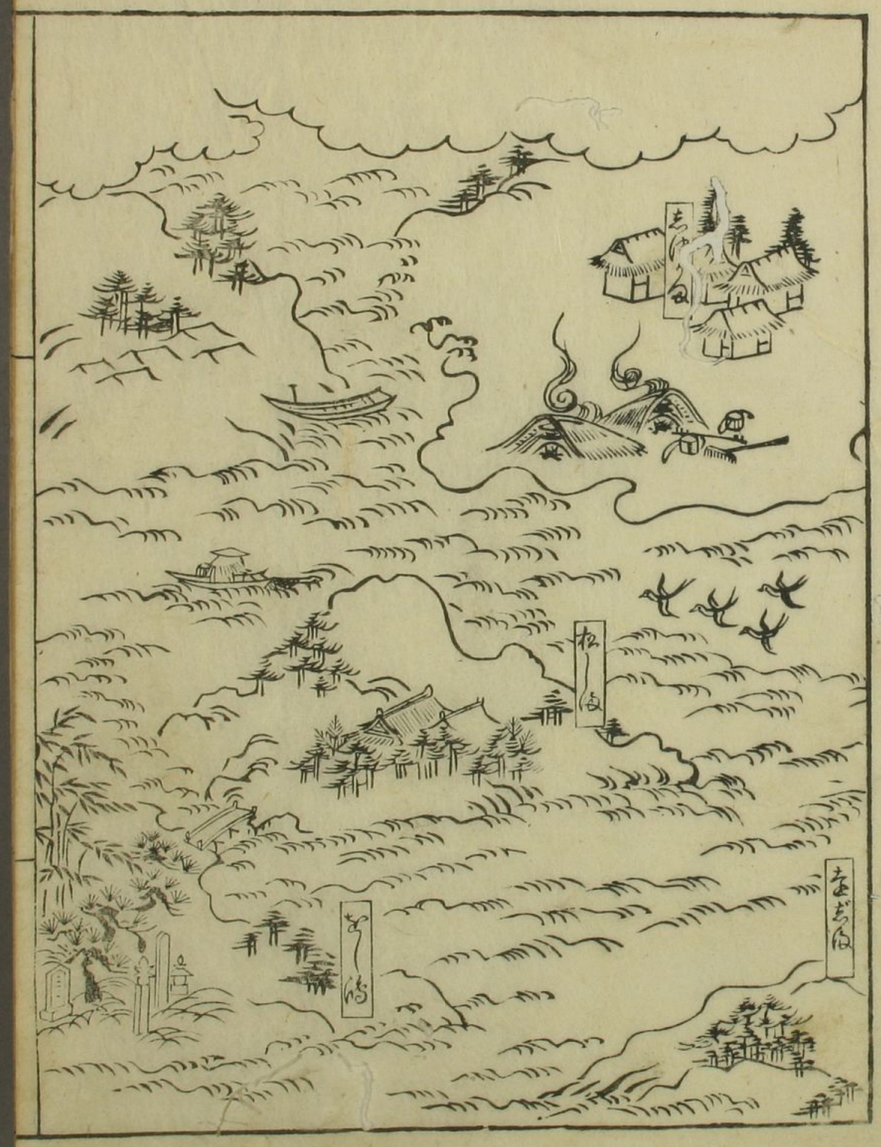
その日こゝわかこゝふこゝのうこゝにり

つきぬ神代いかなる波のかくはつせ
たゝよふ波おとは中なりぬしられひ
かりふしゝへるに海よりあらたくかけ
て浦ちとちよりつたはりて磯ちとを
めくらしく山の陰をゆくあをあれ
家もゆかりくたらなゝへあり市ゝり
乃ちのりるもとゝ波あくなしん
しらるうしくあのつかてもおらしや

ゆくもとちなりゆあゆく月かゝるの
とくゝくゝくゝくていくちとうゝ
うみゝゝ六十余のうちよ波かゝとゝ
とゝろよ似ゝるゝいかあの人名
いひんもちとうなあゝゆわし
きあの月とりかやちかれ
うゝくあとゝとかるん
そ主ちうゝひよ松浦よたつより

奈福寺とてあるあり是法禅師開山の地
なり僧元百人ばかりとやとかや寺のあ
みだこの堂のうしろにいけるくふるあか
とりとりもそのかたちをもむしはみの
きを落しく海をあをきてくるるありその
ありてこの小浦地ありてあり杉浦乃む
らにのぼりくるまゆる海の杉とりと
て一つの丸堂あり大きさ六やうて五太

ものとあらせたり南へひろく山かあの
後さかふなくたかくほうに
みちあり海はさいつてひゆきて
もてそれよりはひかさふあ本と
あとあるこのもてゆきふ南にあり
らもえのこりとゆくそれより
そこ船てるくこ小浦あり山まんと
ちなるへしこ小南よつるとはるくこ


松島
多賀城

大師堂

ゆきつてゆくところわりゐ法寺を
素通のこゝるなるゝひよ地蔵かうちとて
へとくまろ小法寺より直一町ところ
ゆさし出く松竹ゆひなるもて苔あく
んとうゑところあるゝ山あの人ゆとうゑて
なりゆけるゆ白骨とゆさしるゆなりその
ほう殺んの人のうちあるりてゆのゆくゆ
りくゐいてあれれよて法をみくゆれ

しうゐ二ゐるとて法ゆ待
生まれてゆゑれのゆとを杖法や
とて法ゆ猫のあるとゆうゑる
いてゆてりのゆつて法ゆ待ほう
まとびさし殺ゆなりぬゆくゆひのゆ
ゆうゑこの人ゆゆうまのゆゑて殺ゆ
待人よゆさゆひぬゆりゆしゆ
しゆ人ゆうゑりあゆゆしうゑ

うきてくやかしてとりるひつて嬉うれの
井ちかのとんめくを待うんしたちひれお
をひ出るうんちをし待て素性法師う
うはの山みくちをへ中ねよゆきあひける
をかへやとちひ待りさけても雪の松山
いかてうれ所のうとたゆきうるゆきふり
かちとんを物じなれゆに待うんむ
かをおうう丸宿のかかれ井れれかうの

ぬかりとあかうそりう待をとをを待てこ
みをし待うんと物りひうん松乃物ら業
かてかをあうくく待うん中み松をうん
りかうをとをきを恨かれれうあくうつを
見かくゆうれをの紅ろひあつくく待て
山人よりり出てを待うんかるれ
ををの松山をつかをうあをを
かををふををうぬをなん

う角

流とうぬ神さんぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

山さんかさのかぜをもゆ

ちうよ打せぬらうれりうをゆりひらき

ゆいくさきひの衣ゆをちぐ道海うり伯

しふまさのの人

とりかうくもうちゆうさん造のうれ

ううのちかうういうをのいなー

かく角

造かうしたうちうをてていうみうさめ

もうんさうかうのいかやかうん

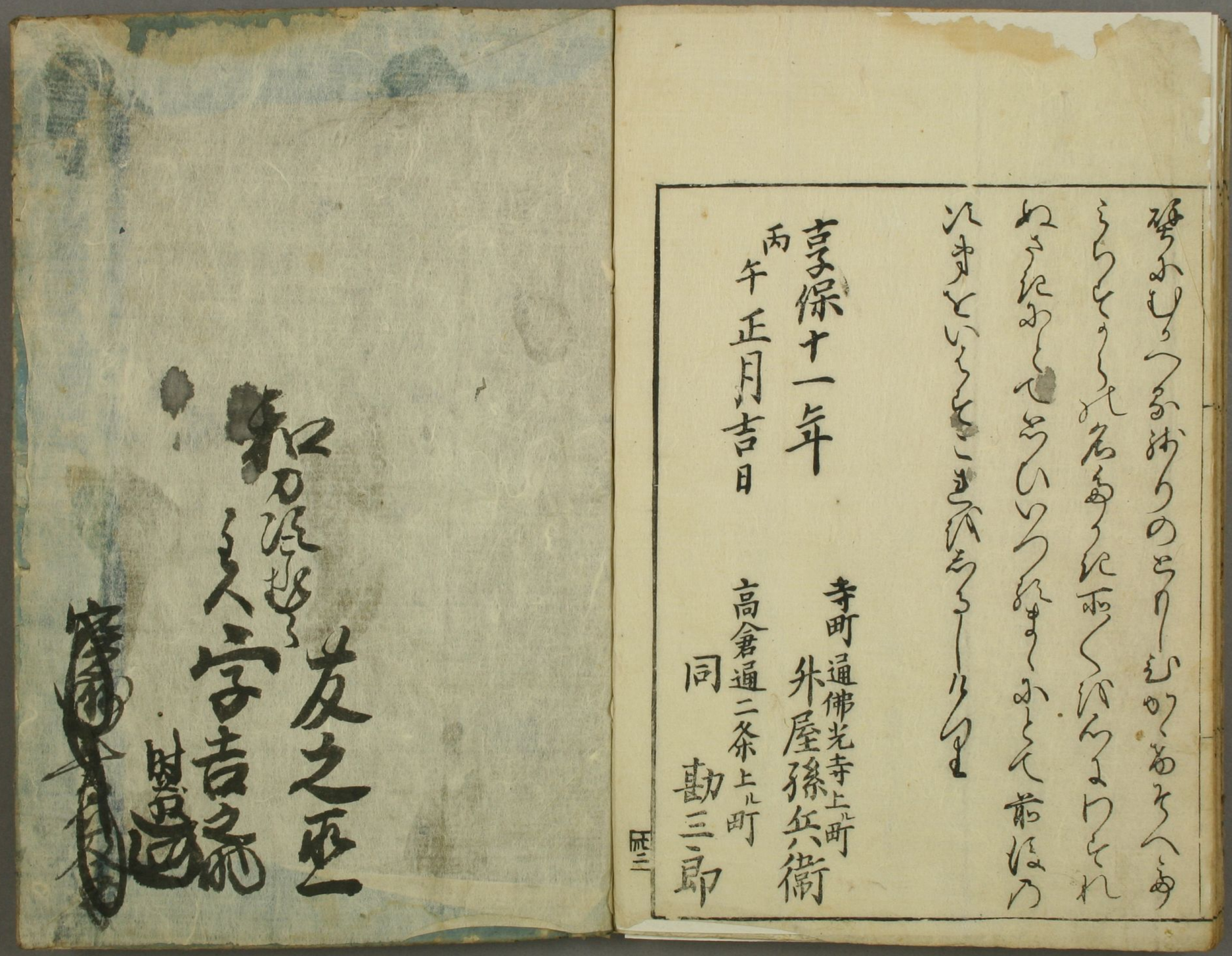
かくのうわくかはゆくかふ月うをを造りう

ゆちうふ赤さのうをゆかつなくいた

うをと家海とちうしるういかけをうを

かくう角をうちいうを伯ほとに一和

ぬんきひの若めくをれ伯うをちうして



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

享保十一年
丙午正月吉日

寺町通佛光寺上ル町
外屋孫兵衛

高倉通二条上ル町
同　勘三郎